



# 学芸員のイッピン展

2024年 博物館実習3履修生



# ごあいさつ

南山大学人類学博物館には、約 10 万点もの資料が収蔵されています。2015 年より始まった企画展「学芸員のイッピン展」は、当館学芸員が選んだおすすめの「イッピン(一品・逸品)」を、実習生とともに展示したものです。

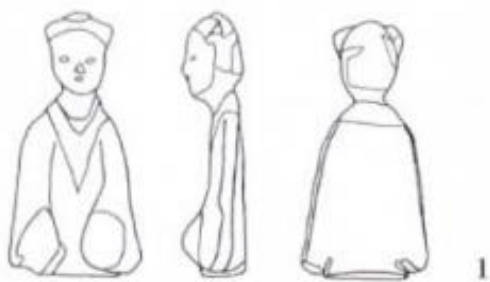
今回は、当館所蔵資料のうち、常設展示でも見られるパプアニューギニアの「火踊り仮面」に加え、普段展示されていない中国古来の「明器」と、夏に似合う大正・昭和の虫よけ製品を紹介します。現代の日本では見慣れない展示物の数々をぜひこの機にご覧ください。

# 明器

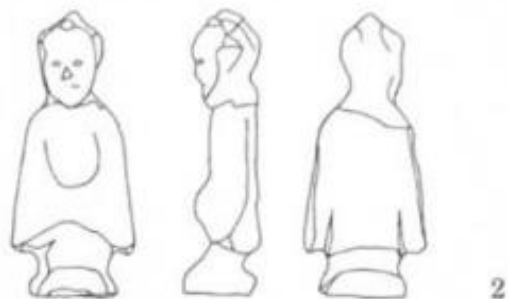
明器とは中国で殷代から清代に至るまで、墓の副葬品にするために作られた器物です。神明の器の意味で、当初、礼に用いられる器物全てを指しましたが、のちに副葬品のみを指すようになりました。当館の所蔵品として、陶俑と陶屋の2種類があります。陶俑は5点あり、兵士や侍者であると考えられます。陶屋は家屋の形をしており、屋根の部分と壁や床の部分に分かれています。この陶屋はその分類の中で「倉」に該当すると推測されますが、この二つが共伴関係にあるかは断定できません。

# 陶俑1~5

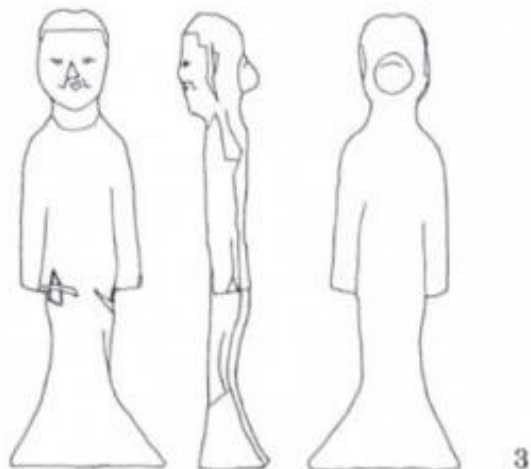




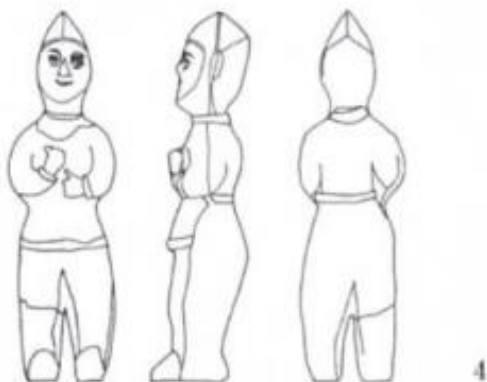
1  
侍者  
漢代の俑にみられる特徴がある



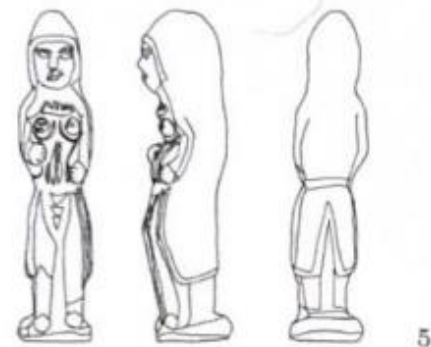
2  
侍者  
前漢に作成されたと推測される



3  
不明  
前漢に作成されたと推測される



4  
兵士  
北魏の俑との類似点がある



5  
兵士  
前漢末期以降の作であると推測される

## 陶俑

南山大学人類学博物館紀要第32号  
32ページの図版を改変

# 陶屋



# 蠅&蚊と暮らせば

毎年夏になると、新しい虫よけ製品が発売されます。その種類は年々多様化していますが、今日とは生活・衛生環境が異なっていた時代には、どのような道具が使われていたのでしょうか？

この企画展では、当館所蔵の大正・昭和の生活資料から、とりわけハエとカの対策に特化したアイテムをご紹介します。

公衆衛生の整備が不十分であった頃は、ハエによる害は日常でした。そのため、ハエの習性を利用したゼンマイ式の蠅取り器や、食品をハエから守ると同時に通気性を保つ蠅帳などが使われていました。

今でもおなじみの蚊取り線香は、19世紀末に考案されました。除虫菊の成分を線香に混ぜ、渦巻状にすることで、燃焼時間が長くなるよう工夫されています。



# 蠅取り器「ハイトリック」

大正2年に発明されたゼンマイ式の蠅取り器です。のちに名古屋の尾張時計株式会社(現・尾張精機株式会社)が販売し、海外にも輸出されました。

まず箱上部の板(※➡部)に、酒や酢に砂糖を混ぜたものを塗り、ハエをおびき寄せます。はゼンマイ仕掛けでゆっくりと回転し、とまっているハエを箱の中に取り込みます。箱の片側には採光窓付きの網かごがあり、明るいところに集まるハエの習性を利用して捕獲します。



寄贈者:岡崎神谷家

# 蠅帳(はいちょう)



寄贈者:中村家



扉を開くと…

寄贈者:森家

# 蚊取り線香入れ



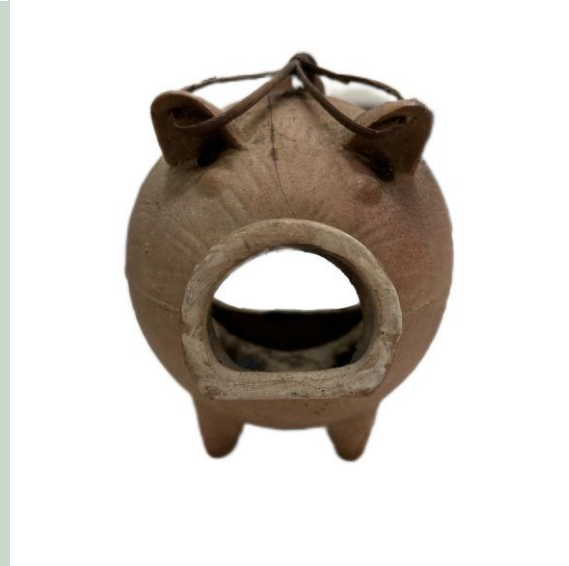
寄贈者:中村家

# 蚊やり薫窯



寄贈者:竹本家

# 蚊取り豚



寄贈者:奥村家

# 蚊取り線香

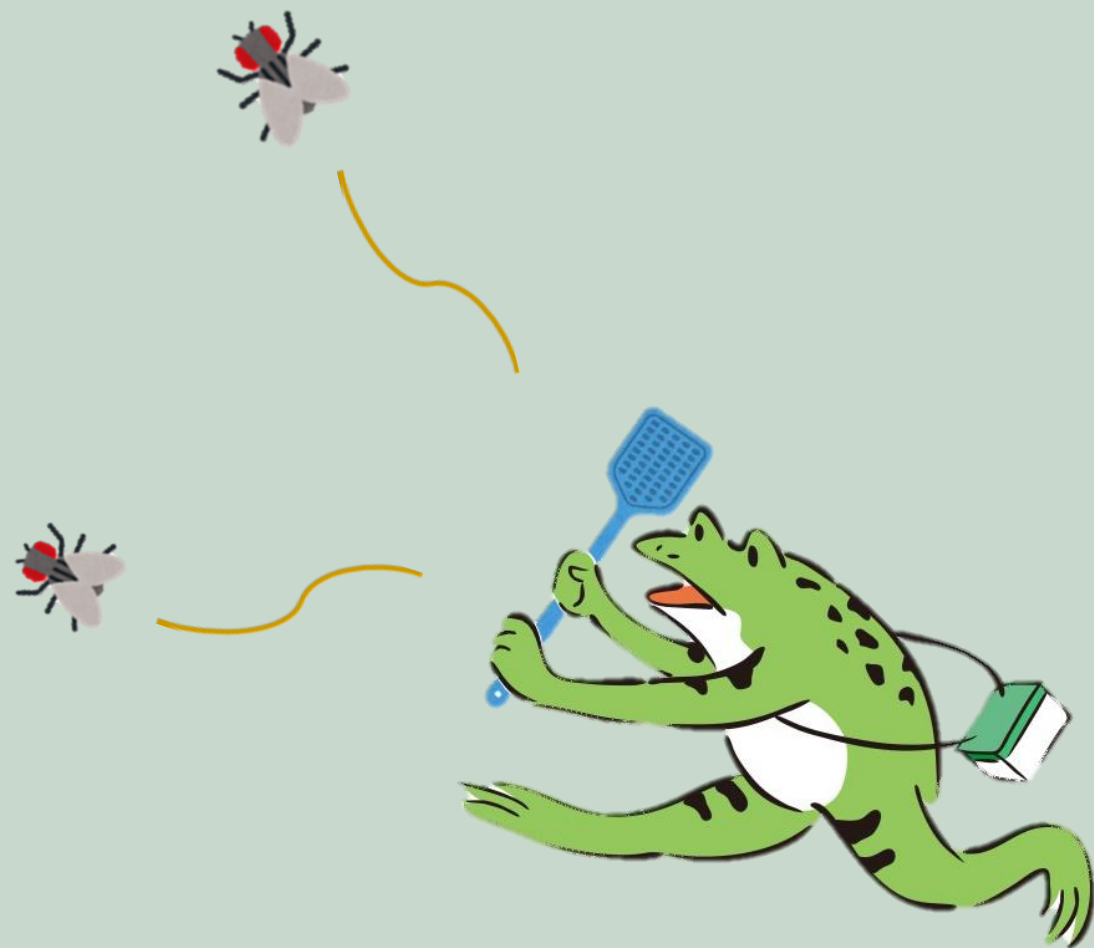


寄贈者:重松家



寄贈者:重松家(左) 森家(右)

# 蠅たたき



# 火踊り仮面

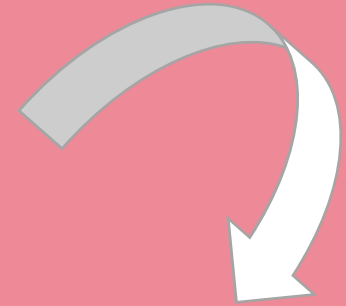
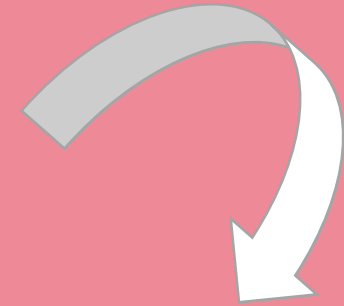
火踊り仮面とは、パプアニューギニアのニューブリデン島ガゼル半島に暮らすバイニング族が使用する仮面です。バイニング族の男性たちはこの仮面をかぶって、暗闇の中、火の周りで歌や楽器を奏で、火の中に飛び込んでいく伝統舞踊「ファイヤーダンス」を行います。

素材には、樹木の内皮を叩き伸ばした樹皮布(タパ)が用いられています。ヒクイドリを模して作られており、大きな眼とくちばしと肉垂が特徴的です。

# 見どころ

人類学博物館では、火踊り仮面を13点所蔵しています。形状やデザインが見どころです。今回の展示には、頭部が蝶々のものとマッシュルームのような形をしているものを選びました。眼の表現、配色は統一されているものの、裏側には繊細な図柄が描かれており、その図柄も非常に多岐にわたります。それぞれの図柄にはどのような意味が込められているのでしょうか。後ろには常設展示の火踊り仮面もあるのでぜひ比較してみてください。

# 火踊り仮面



民族:バイニング族